

コーチングを活かした授業がレジリエンスに与える効果 —1年後の検証—

○西垣悦代(関西医科大学)
藤村あきほ(関西医科大学)

鳥羽きよ子(ハートランドしぎさん看護専門学校)

キーワード: コーチング, レジリエンス, 看護学生

背景と目的

筆者らは、看護教育における「人間関係論」の授業にコーチングを取り入れ、その効果を検証してきた。コーチングは、他者を承認し、否定することなく傾聴することで、他者との間に信頼を築くことが基本である。これは看護師に必要とされる基本技能のひとつである、患者やその家族との間に信頼を築き、円滑なコミュニケーションを取る上で役立つと考えたからである。

これまでの研究より、コーチングを取り入れた10回の授業の終了直後では、授業前に比べて受講生のコーチングに対する自己効力感およびレジリエンスが有意に高まることが明らかにされた(西垣・鳥羽・藤村, 2018, 2019)。

本研究は、受講後1年経過した学生が、どの程度授業内容を覚えているか、また自己効力感とレジリエンスがどのように変化しているかを明らかにするために実施した。

方法

調査対象者 2018年度にコーチングを取り入れた人間関係論の授業を受講した看護専門学校の2年生37名。2018年と今回(2019年)のデータが揃っている有効回答者数は23名であった。

尺度 コーチングコンピテンシー自己効力感尺度改良版(CCSSES-R)、コナー・デビッドソン回復力尺度(CD-RISC)、授業に対する記憶および有益性に関する質問と自由回答

結果

授業内容の記憶および有益性に関する質問では、「授業でやったことを覚えている」に対して65.2%(15人)が「よくあてはまる」または「あてはまる」と回答した。また「授業でやったことは、今の自分に役立っている」の質問に対しては60.9%(14人)が「よくあてはまる」または「あてはまる」と回答した。授業内容に関する質問の中で、覚えているとの回答が特に多かったのは「誰ひとり間違っていないので、否定や批判をしないこと」と「自分の将来の看護師像を考え、発表したこと」の2つであった。

CCSES-RおよびCD-RISCについて、2018年の授業前後と今回の得点をFigure 1, Figure 2に示した。CCSES-Rは、2018年授業前の平均値が86.74(SD = 10.60)、今回の平均値が86.39(SD = 16.80)であった。一方CD-RISCは、2018年授業前

の平均値が46.87(SD = 11.64)、今回の平均値が49.00(SD = 14.34)で、授業前の平均をわずかに上回るレベルに戻っていた。

授業内容に対する記憶に関する質問の合計得点について平均を下回った10名を低群、平均より高かった13名を高群として、今回と1年前の授業後の得点の差の中央値を比較した。CCSES-Rの差の中央値が低群では-29.0であったのに対し、高群では-24.0であった。CD-RISCにおいても、低群では-17.5であったのに対し高群は-10と、低下の程度が少なかった。高群のCD-RISCの値は授業前に比べて+8.0上昇していた。

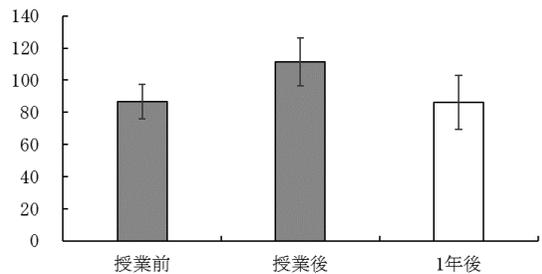


Figure 1 CCSSES-Rの得点の比較

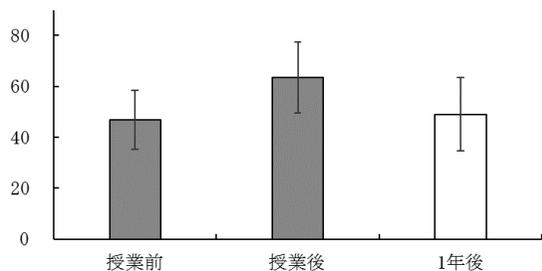


Figure 2 CD-RISCの得点の比較

考察

コーチングを取り入れた授業は、1年経過後も半数以上の受講生が記憶し、有益性を感じていることが示された。授業の受講後に上昇した自己効力感およびレジリエンスは、全体では1年後にほぼ元の水準にもどるものの、授業内容を覚えている人は効果の持続性がより高いことが示唆された。

引用文献

西垣悦代・鳥羽きよ子・藤村あきほ(2019). 看護学生に対するコーチングを活かした授業の効果(1)(2)日本教育心理学会第61回総会発表論文集